



原典で読む

# 外国人が見た日本

高橋知明

(瀬田玉川神社禰宜・公益財団法人  
鎮守の森のプロジェクト事務局次長)

## 第三回 カッテンディーケ『長崎海軍伝習所の日々』(後編)

カッテンディーケは長崎海軍伝習所において、数学・科学・測量術・操船技術などの近代科学や海軍を運用するための基礎知識を教授するとともに、長崎周辺の海で頻繁に航海演習を実施しました。ちなみに、カッテンディーケは滞在中、もっぱら長崎周辺で学生の教授にあたり、ついに江戸には行かずじまいでしたが、航海演習では薩摩や佐賀まで足をのばして島津斉彬や鍋島閑叟など雄藩の藩主とも会見し、近代化に熱心であった彼らの質問に応答し助言しています。ただ、着任当初の伝習所では往生したようです。

「大抵の学生は、ただ彼等が将来立身出世に役立たしめたために、何か一般的

あつたから、皆同氏に非常な信頼を寄せていた。それ故、どのような難問題でも、彼が中に入ってくればオランダ人も納得した。しかし私をして言わしめれば、彼は万事すこぶる伶俐であつて、どんな工合にあしらえば、我々を最も満足させるかを直ぐ見抜いてしまったのである。すなわち我々のお人好しを煽て上げるといふ方法を発見したのである」

さらに、生徒たちと咸臨丸による航海演習で薩摩を訪れた時のこと。カッテンディーケはひどい風邪をひいていたため船内に残りました。日本人の士官たちは当直以外は皆上陸してしまいましたが、勝だけは上陸しなかつたというのです。「私はそれには及ばぬと断つたが、結局何の役にも立たなかつた。それが日本の慣習、彼が守らねばならぬ礼儀であつた」冷静でしたたかな一方、いかなる時も教官を立てる義理堅い一面があることも、彼が勝に対し信頼を寄せた理由の一つだったかもしれません。

他にも彼が高く評価した人物に、後に幕府海軍の重鎮であり、函館の五稜郭で最後まで抗戦した榎本武揚がいます。

「私はこの航海によって如何に日本人が航海術に熟達したがつて如何に日本人が驚いた。ヨーロッパでは王侯といえども、

知識を身に付けたいという目的だけで長崎へやって来たに過ぎない。ただ少数の者だけが海軍で身を立てる覚悟で来たのであつた。……日本はイギリスにも劣らぬ、海軍国となるべきあらゆる必要条件を誂え向きと言つてもよい程に具備している……多数の良い港湾や善良なる海員、また造船用のすべての材料が到る所にある。私は日本がきつと、いつかは、そこまで来るであろうことを信じて疑わない。しかしそれには無論、まだ長い年月が経過し、幾多の先入観が取り除かれねばならないであろう」

開国間もない当時の日本は、近代科学に対する無理解、蒸気船は帆船とは違う



カッテンディーケ

海軍士官となり、艦上生活の不自由を忍ぶということは、決して珍しいことではないが、日本人、例えば榎本釜次郎氏(武揚)のごとき、その先祖は江戸において重い役割を演じていたような家柄の人が、二年來一介の火夫、鍛冶工および機関部員として働いているというがごときは、まさに当人の勝れたる品性と、絶大な熱心な物語る証左である」

カッテンディーケは身分にかかわらず、国を守るという目的のためにどんな仕事でも行う榎本のような生徒を見て、旧体制の殻を破った先の日本の将来に光を見たとはいへません。

実際、生徒たちの成長ぶりは彼も目を見張るものでした。「その入港ぶりたるや、よほど老練な船乗りでなければできない芸当である。船と船との間に錨を卸ろしたりする大胆な振舞いをやつてのけた。彼等は実に測り知れない自負心を持つている」と、生徒のみで成し遂げ

ことや海軍に対する無理解、国際慣例に対する無理解、門閥が幅を利かせる身分制度、旧習にこだわり能力に相応の仕事させない動脈硬化的な思想——カッテンディーケにとつてはこうしたものが溢れているように見えました。彼にとつては海軍教育を教授しようにもかなり窮屈な思いをしたことでしょう。

そうした中、世界に肩を並べるために広く目を開き、一日も早く身に着けようと努力した日本人もいました。

カッテンディーケは、特に信頼を寄せた人物の一人について、「私は同人をただに誠実かつ敬愛すべき人物と見るばかりでなく、また実に真の革新派の闘士と思つている。要するに、私は彼を幾多の点において尊敬している」と語っています。その人物の名は、勝麟太郎(海舟)。人格識見並びに蘭学において頭抜けていた勝は、伝習所の生徒百十数名を取りまとめる伝習生徒監でした。カッテンディーケはこんなことも書いています。

「大目付役(※幕府の監視役)は、どうもオランダ人には目の上の瘤であつた。おまけに海軍伝習所長は、オランダ語を一語も解しなかつた。それに引き替え艦長役の勝氏は、オランダ語をよく解し、性質も至つて穏やかで、明瞭で親切でも

た操船を評価しています。

ところが、長崎から江戸まで咸臨丸とエド号を無事往復運航したことを契機に、幕府は蒸気船の操縦術習得は完成したと判断、江戸から遠い長崎に伝習所を維持する財政負担が大きいことも相俟つて、伝習所の突然の解散を決めます。こうして突如オランダに帰国することになったカッテンディーケですが、最後にこう記しています。

「これら日本士官の多くは、我々と訣れるにあたり皆涙を目に湛えていた。だから私は、我々に教育せられたあの人たちは、きつと皆オランダ海軍派遣隊が日本に尽くした業績を多としてに違いないとの信念を懐いている。彼等はその社会的階級よりして見るに、政治上権勢を振るうべく運命づけられた人々であるから、彼等が我々の業績を多としていることは、必ずや日蘭関係の上に良好なる影響を及ぼすに相違ない」と。

日本海軍の礎を築き、日本人固有の睿智と才能をよく見出して、これを日本人のみならず、世界人類の福祉増進のために役立たしむべく錬磨してくれたカッテンディーケ。その教え子たちは、各々の立場で激動の幕末・明治を乗り越えていくことになりました。